岐阜市立女子短期大学研究紀要第 54 輯（平成 17 年 3 月）

James Joyceの“Araby”にみられるイメージ

Images in “Araby” by James Joyce

吉　田　恒　義

Tsuneyoshi YOSHIDA

Abstract

“Araby” is one of the fifteen stories of *Dubliners* (1914) written by James Joyce (1882-1941). The main character of this story is a boy who has been brought up by his uncle and aunt. He is attracted to Mangan's sister. One day she said to the boy about a splendid bazaar called *Araby*. She suggested that he should go to *Araby*. So he decided to go to *Araby* and as a token of his love for her he was going to buy her something. In spite of some difficulties which kept him from going to the bazaar, the boy managed to go to the destination. When he came to *Araby*, almost all of the stalls except a few ones had been closed. As a result, he could not buy her something. Throughout the story James Joyce tried to depict the figure of the boy who set out on his journey full of hope seeking for the truth, using many images or expressions. In this paper, the effect of many images or expressions seen in “Araby” will be investigated.

キーワード：ジョイス、アラビー、イメージ、マンガンの姉、
Keywords: Joyce, Araby, image, Mangan's sister

（1）

ジェイムス・ジョイス(James Joyce) の *Dubliners*（1914）は 15 の短編をまとめた短編物語集で、「アラビー」“Araby”はそのうちの 1 篇である。ジョイスは 15 の短編を少年期、成人期、成熟期、市民生活の 4 期に分けているが、「アラビー」は少年期 3 編のうち、“The Sisters”と“An Encounter”の後を受けた最後のもので、次の成人期の作品に至る橋渡しの役割を務めている。

「アラビー」の主人公は十代の少年で、物語は少年の視点で語られている。主人公の少年が友達マンガン(Mangan) の姉に淡い恋心を抱き、彼女の勧めもあってアラビーという名のバザーに行き、彼女への愛のしるしとして贈り物を買おうとする。アラビーとは、歴史的には 1894 年 5 月 14 日から 19 日にかけてダブリンで開催されたバザーの名を指し、豪華絢爛で神秘とロマンスの世界を連想させる。このような東方への憧れの色調が「アラビー」という作品全体に行きわたっており、少年のマンガンの姉に寄せる思慕の情と重なっている。少年は彼女への贈り物のためにアラビー・バザーに出かけていくのであるが、目的を達成することができず、苦い体験をする。こうした内容をジョイスはどのような表現、どのようなイメージで読者に伝えようとしているのか考えてみたい。

（2）

作品の第 1 パラグラフから第 3 パラグラフにかけて、主人公である少年の住まいや、その近所、少年のまわりの環境が描写されている。第 1 パラグラフでは少年の家がどのような場所にあるのか、説明されている。

> North Richmond Street, being blind, was a quiet street except at the hour when the Christian Brothers' School set the boys free. An uninhabited house of two storeys stood at the blind end, detached from its neighbours in a square ground. The other houses of the street, conscious of decent lives within them, gazed at one another with brown imperturbable faces. (21)[1)]

少年の住む家はノース・リッチモンド通りにあり、“blind”という言葉が示しているように行き止まりになっている。“blind”という語から、逃げ場のない、行き詰まり状態のむなしさというイメージが浮かび上がってくる。ノース・リッチモンド通りにある少年の家やまわりの家は“brown”である。“brown”は生気を欠く状態や、枯渇を意味する。フリース(Vries) の『イメージ・シンボル

事典』(*Dictionary of Symbols and Imagery*) によると、“brown”は枯渇(decay)と麻痺(paralysis)のイメージを持ち、ダブリンを特徴付ける色[2] である。通りの褐色の家々が互いにじっと見つめ合っている。“gazed”という動詞から褐色の家々が擬人化表現されている[3] ことが明白で、この擬人化表現は読者に褐色を印象付ける効果を与えている。

現在の少年の家は司祭が住んでいた家であったこと、その司祭はすでに亡くなってしまったこと等が、第 2 パラグラフで説明されている。家の物置部屋には司祭が遺していった数冊の本があった。

> Among these I found a few paper-covered books, the pages of which were curled and damp: *The Abbot*, by Walter Scott, *The Devout Communicant* and *The Memoirs of Vidocq*. I liked the last best because its leaves were yellow. (21)

主人公の少年は司祭が遺していった本の中でも、紙質の黄色い本が一番好きであった。“yellow”は枯れる色、生命の衰退を表現する色であり、“brown”と同様に無気力と衰退をイメージさせる色[4] である。

第 3 パラグラフにおいては、少年の住む家の界隈の夕暮れ時の情景について述べられている。短い冬の日々は子どもたちの夕食前に暗く冷たく暮れてしまう。頭上には「刻々と変わっていく紫色」“ever-changing violet”(21)の空がある。“violet”は世俗性と精神性の中間の段階を表す色[5] で、少年の今後の運命を暗示するような色である。子どもたちは物陰から「半開きの扉からさす光に、くっきりと輪郭の浮き上がった」“defined by the light from the half-opened door”(22)マンガンの姉の姿を見つめる。ロマンチックな愛の行方を象徴するような表現である。少年の心はマンガンの姉の姿に捕らえられてしまう。“Her dress swung as she moved her body and the soft rope of her hair tossed from side to side.”(22)という表現から、彼女の“soft rope”に目が移ってしまう少年の姿を思い浮かべることが出来ると同時に、マンガンの姉に対する少年の微妙な心の状態を読み取ることが出来る。

（3）

少年が思いを寄せるマンガンの姉の姿は次のように描写されている。

> I kept her brown figure always in my eye and, when we came near the point at which our ways diverged, I quickened my pace and passed her. This happened morning after morning. I had never spoken to her, except for a few casual words, and yet her name was like a summons to all my foolish blood. (22)

少年は彼女を「褐色の姿」(her brown figure)として常に捉えている。“brown”という単語は第 1 パラグラフで見られたようにここでも枯渇と麻痺のイメージを積み重ねている。ダブリンの街にも、またダブリンに住むマンガンの姉の姿にも褐色の色調が漂っている。この色調は主人公の少年を含めたダブリンの人たちの活気のない姿と重なっている。実際、少年はマンガンの姉の姿を毎日見ることはあっても、自分のほうから決して彼女に話しかけるということはしなかったからである。

少年は土曜日の夕方、伯母に連れられてよくマーケットに出かけた。このような時にもマンガンの姉のイメージが少年の心に浮かんでくるのである。

> Her image accompanied me even in places the most hostile to romance. On Saturday evenings when my aunt went marketing I had to go to carry some of the parcels. We walked through the flaring streets, jostled by drunken men and bargaining women, amid the curses of labourers, the shrill litanies of shop-boys who stood on guard by the barrels of pigs' cheeks, the nasal chanting of street-singers. . . . (22-23)

少年は雑踏にあふれるダブリンの街を通り抜けていく。酒に酔った男たちや品物の値段を値切っている女たちのような醜い大衆の姿が少年の目に飛び込んでくる。少年の耳には店員たちの“litanies”が聞こえてくる。“litanies”は本来は司祭の唱える祈祷に対して会衆が一つ一つ答えて唱和する形式の祈祷のことを指すのであるが、ここでは客寄せをしている店員の連呼の意味で使用されている。マンガンの姉との淡いラブロマンスを頭の中で思い描く少年にとって、醜い大衆、雑踏の中にあって、彼の心の中に浮かび上がるマンガンの姉の侵すべからざる神聖なイメージが汚される思いがしたのであろう。少年はここは「ロマンスにとっておよそふさわしくない場所」(places the most hostile to romance)であると感ずる。

少年の心にはマンガンの姉の神聖なイメージを是が非でも護らなければいけないという強い気持ちが生まれる。

> I imagined that I bore my chalice safely through a throng of foes. Her name sprang to my lips at moments in strange prayers and praises which I myself did not understand. My eyes were often full of tears (I could not tell why) and at times a flood from my heart seemed to pour itself out into my bosom. I thought little of the future. I did not know whether I would ever speak to her or not or, if I spoke to her, how I could tell her of my confused adoration. But my body was like a harp and her words and gestures were like fingers running upon the wires. (23)

人であふれている街路を通り抜けていくとき、少年の頭の中には様々な思いがよぎっていく。彼はあたかも自分がロマンス物語の中の英雄になったかのような思いにとらわれる。少年は「敵の群がる中を自分の聖杯を安全に運び出す」(I bore my chalice safely through a throng of foes) 自分の姿、幻影、イメージをロマンスの世界の中に追い求めていく。

“chalice” はここでは少年の精神的愛の象徴、宗教の象徴であると考えられる。褐色の服を着たマンガンの姉は、少年にとって思慕の念を抱く対象を通り越して、より次元の高い礼拝の対象となっているような雰囲気を生み出している。マンガンの姉は「聖母マリアのイメージ」[6] をもって少年の目の前に現れると言ってよいだろう。これまでのマンガンの姉へのロマンティックな愛だけでなく、礼拝の対象としての彼女への宗教的な愛との入り混じった気持ちが少年の心にはある。この少年の気持ちは“my confused adoration” という表現によって明白である。さらに少年は自分をハープ(harp)の弦(wires)にたとえ、彼女の言葉とジェスチャーを弦の上を走る指にたとえている。この比喩表現から、マンガンの姉に関してはハープを弾く天使のようなイメージも浮かんでくる。マンガンの姉に対する少年の侵すべからざる神聖な精神的愛を感じ取ることができよう。

（4）

マンガンの姉がとうとう少年に話しかける日がやってくる。このことは少年には全く突然のことで、「自分は頭が混乱し、どう答えてよいかわからなかった。」“I was so confused that I did not know what to answer.”(22)と少年は自分の気持ちを説明している。この少年の気持ちは、彼の驚きの気持ちを素直に伝えていると言える。彼にとって彼女は遠い憧れの存在であった。その彼女から突然話しかけられ、この予期せぬ出来事にどのような対応をしたらよいのかわからずにおどおどしている少年の姿が鮮明に伝わってくる。彼女は少年にアラビーに行くのかどうかを聞いた。少年は「自分がはいと答えたか、いいえと答えたかよくは覚えていない。」“I forgot whether I answered yes or no.”(22)と述べているように、この少年の答え方からも、少年のおどおどした態度が明白に伝わってくる。

少年はマンガンの姉からアラビーはすばらしいバザーであると教えられる。アラビーへ行く気になってしまった少年は、少女との会話以来、寝ても覚めても何を考えているのかわからなくなってしまう。アラビーへ出かける当日までの数日間が、少年にとってはとても退屈な日々のように思えてくる。学校の教科書を読もうと思ってもいつもマンガンの姉のイメージが少年の目の前に浮かんできてしまう。アラビーという言葉の響きは、少年に対して「東洋的な魔法」“an Eastern enchantment”(24)をかけるように呼びかける。アラビーは少女との関連で少年の耳にロマンチックなイメージを想起させる言葉に聞こえるのである。

少年は土曜日の番にバザーへ出かけることが出来るように、許可を伯母に求めた。しかし少年の伯母はアラビー・バザーが健全なバザーであるのかどうか大変心配したりした。学校では先生が少年のことを近頃勉学を怠けているのではないかと思って、少年に対して以前よりも厳しい態度をとるようになったりした。さらには、少年がアラビーに出かける晩、少年の伯父は仕事の帰り道、途中でアルコールを飲んだりしたため、いつもより遅く帰宅した。このように、伯母の心配、学校の先生の態度の変化、伯父の遅い帰宅など少年のアラビー行きを妨げるような要因が重なったりした。これらの要因の一つ一つが結果として孤独な少年のイメージを浮上させたりしている。

アラビーへ出かける土曜日の晩、まだ帰宅していない伯父の帰りを待ちわびる間、少年は「想像によるマンガンの姉の茶色の服を着た姿」“the brown-clad figure cast by my imagination”(25)を目に描いていた。アラビーへ出かけ、彼女への贈り物を考えている少年にとっては、伯父には一刻も早く帰宅してもらいたいところであった。その間にもマンガンの姉の姿、具体的には光のあたった彼女の白い首筋、髪の毛、手、さらにはドレスの下の「ペチコート」“a petticoat”(24)の裾が鮮明に浮き上がってくるような彼女の姿を少年は目に描いていたのである。ここで少年が思い描くマンガンの姉の姿は、これまでの聖なる女性のイメージだけではなく、少年を誘惑する女のイメージも強く現れた姿である。

少年が待ちわびていた伯父は彼のアラビー行きのことはすっかり忘れて遅く帰宅した。それでも少年は夜遅くになって、ようやく伯父から「フロリン銀貨」“florin”(26)を一枚もらい一人でバザーに出かける。誰も乗っていない列車に揺られて、ダブリン市内を

横断し、やがてバザー会場のある駅に到着する。

> In a few minutes the train drew up beside an improvised wooden platform. I passed out on to the road and saw by the lighted dial of a clock that it was ten minutes to ten. In front of me was a large building which displayed the magical name. (26)

少年がアラビーに到着した時には人々がそろそろ寝てもおかしくないくらいの時間帯で、10 時 10 分前であった。目の前の大きな建物を見上げると「魔力的な名前」(the magical name)が目に飛び込んでくる。これは東洋の魔法を連想させる名前で、アラビー・バザーのことである。

（5）

少年が待ち望んでいたアラビー会場の中に足を踏み入れると、会場内はすでに大部分暗くなっている。

> Nearly all the stalls were closed and the greater part of the hall was in darkness. I recognized a silence like that which pervades a church after a service. I walked into the centre of the bazaar timidly. A few people were gathered about the stalls which were still open. Before a curtain, over which the words *Café Chantant* were written in coloured lamps, two men were counting money on a salver. I listened to the fall of the coins. (26-27)

バザー会場では売店のほとんどがすでに閉店しており、「会場のホールは大部分が暗くなっていた。」(the greater part of the hall was in darkness). わずかの売店のみがまだ店を開いており、ほんの数人の人たちがその店の辺りに集まっているだけであった。まるで教会での礼拝が終わった後の静けさが、このバザー会場にも漂っているかのように少年には感じられた。少年の失望感がミサが終わった後の教会の静かな雰囲気のイメージで表現されている。静まり返った会場で、硬貨の音が聞こえる。二人の男がバザーの売上金を数えていたのである。彼らは盆の上で銭を勘定し、硬貨が「落ちる」 (fall) 音を少年は聞く。ここでは“fall”という語が重要な意味を担っている。“fall”は単に硬貨が「落ちる」という意味であるだけでなく、この語にはまた堕落のイメージがあるということに注目しておきたい。少年にとってアラビーは理想の世界であった。しかし、少年が実際にアラビー・バザーに足を踏み入れてみると、そこは彼が思い描いていたような理想の世界ではなく、“fall”という語が暗示しているように、物欲が支配する世俗の堕落した世界と化していた。少年が憧れ追い求めてきたアラビーは神聖な世界ではなく、盆の上で銭勘定をする二人の男に代表されるような物欲が支配する世俗的世界であることを少年は思い知らされる。堕落した世界に身をおいた少年の幻滅と失望の自覚が伝わってくるようである。

少年はまだ開いている売店の前で一人の若い女性と二人の若い男性が談笑しているのを耳にする。

> —O, I never said such a thing!
> —O, but you did!
> —O, but I didn’t!
> —Didn’t she say that?
> —Yes. I heard her.
> —O, there’s a . . . fib! (27)

三人の若者は売店の販売員で、彼らの会話は崇高な世界や理想の世界とは無縁の、意味のない言葉のやり取りでしかない。しかも彼らの言葉には「イギリス訛り」“English accents”(27)がみられることに少年は気付く。恐らく少年はアラビー・バザーの販売員はアラビア人であるかもしれないと期待していたのかもしれない。しかし実際はそうではなく、イギリス訛りを耳にして、自分たちは長年虐げられ従属させられてきたアイルランド人であるということを、少年は自覚したのではなかろうか。アラビーについて少年が思い描いてきた世界は今や幻影と化していった。

少年はマンガンの姉への贈り物を買うことも出来なかった。少年にとってアラビーへの旅はこうしてむなしく終わりかける。

> I allowed the two pennies to fall against the sixpence in my pocket. I heard a voice call from one end of the gallery that the

light was out.　The upper part of the hall was now completely dark. (27)

アラビー・バザーの光が消え、ホールが今や「完全な暗闇」(completely dark)となり、少年は幼い恋心の虚しさを感じ取る。バザーへの旅は結果的に人気のない暗いホールを見出しただけである。
バザー会場の光が消えると、少年は二階の闇を見上げながら惨めな自分自身の姿を見るのである。

Gazing up into the darkness I saw myself as a creature driven and derided by vanity; and my eyes burned with anguish and anger. (28)

少年は自分が「虚栄心に駆り立てられ愚弄された人間」(a creature driven and derided by vanity) であることを悟る。ここで“a creature”は哀れな人間のイメージを持つことに注意しておきたい。そして眼は「苦悩と怒り」(anguish and anger) に燃えた。結局少年はアラビーに対して抱いていた夢が破れ、ロマンスと現実の違いを思い知らされる。

（6）

これまで見てきたように、マンガンの姉に思慕の念を抱いた少年は、彼女のためにロマンを追い求めてアラビーへの旅に出かけた。アラビーへの愛の探求の旅は少年にとっては試練に満ちたもので、孤独な旅であった。父親代わりの伯父の支配的、権威主義的な態度、学校の先生の冷たい態度等、少年のアラビー行きの前に立ちはだかる障壁が存在したが、少年は障壁の一つ一つを乗り越え、たった一人で「バザー行きの特別列車」“a special train for the bazaar”(26)に乗るのである。「特別列車」は、たった一人で試練に耐え、真理探究の旅に出かけていく者にのみ用意された乗り物と考えることが出来よう。

いまだ体験したことのないアラビーの世界、しかも少年にとってはロマンの夢が大きく広がるアラビーの世界の中に、理想的な美を内包する聖なる教会が存在しているはずであった。しかしアラビーの世界が示してくれたものは、明かりが消え真っ暗になったバザー会場の姿であった。少年はアラビーの世界に理想美を求めて孤独の旅をしてきたが、現実はミサの終わったあとの教会にみなぎる静けさと同じ雰囲気を感じるだけで、実際に少年が追求し得たものは明かりの消えたアラビー・バザーの、真っ暗になった会場にすぎなかった。少年にとってアラビーは教会の象徴であったと考えられる。そこに到達しようとする少年の熱意は宗教的熱気を帯びたものであった。しかし少年のそのような熱意は報われることなく、アラビーで彼を待っていたものは崇高なものではなくて、世俗的なものであった。

作品全体に行き渡っている“brown”と“yellow”の生み出すイメージは、少年がアラビーの世界に見出した虚偽の世界のイメージと重なるものである。マンガンの姉は聖母マリアのイメージの他に少年を誘惑する女のイメージも併せ持つ。このことは少年が理想化しているマンガンの姉にふさわしいアラビーの世界、すなわち聖なる教会が、現実にはバザーの売上金を数えている物欲的な男たちが支配する卑俗な世界に変わり果て、堕落したイメージがはびこっていることを暗示していると言える。教会は司祭の死に代表されるように、すでに現在は聖なる教会のイメージを持ち合わせてはいない。本来の教会の機能を失くしてしまった社会においては、少年がアラビー会場で見た完全な暗闇のイメージが色濃く漂っているのみである。このような社会において、少年は作品冒頭の“blind”(21)という言葉のイメージ通りに、虚しい行き詰まり状態に陥ったことであろう。少年の真実探求の旅は以上のように、ジョイスによって巧みに生み出されたイメージによって効果的に描写されていたと言える。

註

1）テキストは James Joyce, “Araby” in *Dubliners* (London: Penguin Books, 1992)を使用した。本論中、作品“Araby”からの引用の直後のかっこ内の数字は頁を示す。
2）Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (London: North-Holland Publishing Company, Ltd., 1976), pp. 66-67.
3）家を擬人化する表現方法はディケンズ(Dickens)の作品にしばしば見られる表現方法である。
4）Vries, *op. cit.*, p. 513.
5）*Ibid.*, p. 488.
6）辻　弘子『『ダブリン市民』と聖書のイメージ』（音羽書房鶴見書店、2001）、p. 22.

（提出期日　平成 16 年 11 月 26 日）